

鈴木雅大：大会・第3回亜熱帯性ホンダワラ属藻類の分類に関するワークショップ参加記

日本藻類学会第30回大会が、2006年3月26日から29日にかけて、鹿児島大学で開催されました。私は大会の前日、宮崎県の青島で海藻を採集、民宿の駐車場で押し葉標本を作製してから、鹿児島入りしました。

27日朝8時45分から、口頭発表スタートです。朝食後、押し葉標本の新聞紙を手早く交換し、市電に乗って会場を目指しました。発表者数は過去最多でしたが、例年通り、A、B二会場制です。厳しいスケジュールと聞いていたので、プログラムに移動のタイミングをピシシと書き込み、2つの会場間をせわしなく行き来しておりましたが、両会場共にほぼ時間通りに発表が進み、全く問題ありませんでした。

午後の部の口頭発表が終わり、夕方から総会に出席しました。学生をやっているとつい無関心になりがちですが、簿記の問題や学会のこれからなど、他人事にはならない事に気づき、良い勉強になりました。また、Phycological ResearchがISIに登録されたという事で、早く論文を書かなければと焦りつつも、俄然投稿意欲が湧いてきました。

総会後は学内の食堂で懇親会です。大会期間中、最も楽しいと感じる時間です。日本藻類学会にはこれが4度目の参加になりますが、年を追うごとに興味の対象が増え、同時に顔見知りの方も増えてきました。入会した当初は、話相手がおらず、懇親会でも1人浮いていたものですが、今では微細藻類、大形藻類とこだわらずに、様々な分野の方々と意見を交換し合えるようになり、大会に参加するのが楽しくて仕方ありません。鹿児島の美味しい肴をつまみつつ、柄にも無くそんな事を想うのは、テーブルに並べられた焼酎のほのかな甘みのせいでしょうか。懇親会後の2次会は、騎射場にある店を貸切ったの盛大なものでした。帰る時、幹事の方々が、最後の1人が帰るまで、道でタクシーを手配し、見送ってくれた姿が印象的でした。

翌28日は、口頭発表の後、午後3時から公開シンポジウムを聴きました。一般の方を対象とした講演は、普段なかなか聴く機会がありません。基礎研究に終始している私にとって、自分たちの研究が、社会や現場にどのように還元されているのか、また、今後、どう還元させていかなければならないのかを考えさせられました。

29、30日は、第3回亜熱帯性ホンダワラ属藻類の分類に関するワークショップ「亜熱帯性ホンダワラ属の分布と分類」が開催されました。ワークショップの会場は、鹿児島市から車で1時間程南下した所にある指宿市です。私は、会場への道すがら、オキチモズクの観察に同行させて頂きました。前日のシンポジウムでは吉田忠生先生による「絶滅危惧藻類の分布と保全：現状と課題」という講演がなされ、レッドリストに記載される事によって、保全を必要とする生き物に対する人々の扱い、関心の高さが大きく変わるという事を学びましたが、絶滅危惧I類と評価される本種とその生育地を観察

するという、貴重な経験をしました。

移動中、愛媛県の博物館から来られた方が「桜とツツジが同じ時期に満開なんて！」と声を上げられました。驚いて、窓の外を見れば、確かに薄いピンクの花の下に濃い紅色の花が咲き誇っています。ピロウやワシントンヤシばかりに目を奪われておりましたが、改めて、九州に来ている事を実感させられる1コマでした。

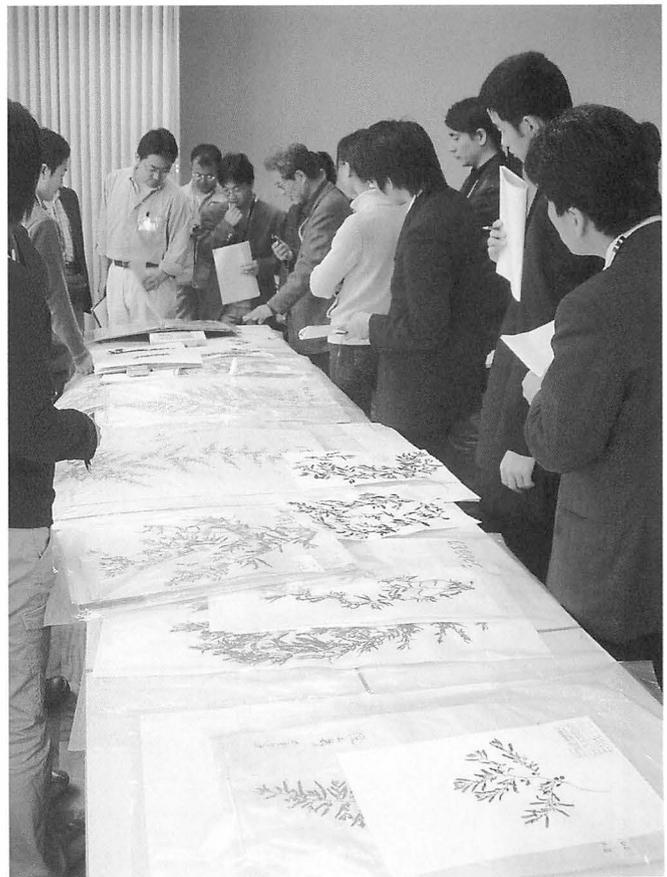
13時から、鹿児島県水産技術開発センターにて、ワークショップが始まり、以下の講演が行われました。

桐山隆哉 他「長崎県沿岸における大型褐藻群落の衰退現象と種構成の変化」

田井野清也 他「近年の高知県沿岸域におけるホンダワラ属の生育状況」

新井章吾「採食圧の強さと季節性が海藻群落の退行的遷移におよぼす影響」

桐山隆哉氏の講演では、藻食性魚類の摂食によるアラメ藻場、ガラモ場の衰退とガラモ場の種構成の変化、さらには暖海性ホンダワラ類の分布が北上している事が、田井野清也氏の講演では、高知県沿岸に生育するホンダワラ属の種構成、



ワークショップ（鹿児島県水産技術開発センター）：参加者が持参したホンダワラ属標本を囲んでのディスカッション

水平分布が変化している事が紹介され、いずれも、近年、藻場やガラモ場に、一連の大きな変化が起こっていることを示しており、大変興味深いものでした。新井章吾氏の講演では、藻食魚を主とする藻食動物の採食圧と採食期間の関係によって、海藻群落の退行的遷移が起こることが示され、移植中心の藻場造成の問題を指摘されました。現場を見てきた方々の話は、豊富な経験に裏付けられており、とても説得力があります。「海の生態系にとって、海水温が1°C上昇するというのは、大変な事態である。」「論文には成功例しか紹介されず、失敗例は決して公表されない。」といった意見には、自分の海や藻場に対する認識の甘さを教えられました。

質疑応答があまりにも盛り上がった為、予定されていたホンダワラ属の標本同定については翌日に持ち越しとなり、一同は、宿泊、懇親会会場のある国民休暇村指宿へと向かいました。私は移動中、砂浜に海藻が打ち揚げられているのを見つつけ、わがままを言って、採集のために寄って頂きました。その夜は盛大な懇親会が行われ、遅くまで活発な議論や各地の話題で盛り上がりました。

翌日は、水技センターのホンダワラ属の標本の検討です。まず初めに、吉田忠生先生と、南のホンダワラ属を専門に研究されている鳥袋寛盛氏から、各種の分類、同定に関するポイントや、問題点などに関する説明が行われました。関東や東北地方のホンダワラ属しか知らない私には、図鑑でしか見た事のない種類ばかりで、メモを取るのに余念がありませんでした。その後、水技センター及び各県の方々が持ち寄られた未同定種についての同定、整理が行われました。同定作業は、時に困難を極めるもので、特に長崎県産のものには、中国大陸から来たもの、いわば「大陸由来種」と思われるような種類も飛び出し、白熱した議論が展開されました。このワークショップの目的は、「各地で海藻に関わる人々が、ホンダワラの情報を共有すること」でしたが、2日間を通し、参加者のホンダワラ属への関心の高さには、始終驚かされました。大成功だったのではないのでしょうか。

ワークショップの翌日(31日)と4月1日は、鳥袋氏の案内で、額娃町と桜島で海に潜っての海藻採集を行い、鹿児島大水産学部にて押し葉標本を作らせて頂きました。移動の

途中に海岸で採集したものや、千葉に持って帰ってから作製したものも入れて40種類、100枚以上の押し葉標本を作製する事が出来ました。学会、ワークショップ、海藻採集に標本作製と、約1週間、鹿児島を満喫させて頂き、大満足で千葉に帰りました。学会とワークショップを通し、単に知識としての情報だけでなく、微細藻類から大形藻類、基礎に携わる方から応用、産業的なものに携わる方、ナチュラルリストからサイエンティストまで、様々な分野、立場の方々の考え方、興味の対象や価値観の違いなどを、実際に語り合いながら学ぶことが出来、得難い経験をしたと思います。このように有意義な学会、ワークショップが今後も引き続き開催される事を望みます。

最後になりましたが、当初懸念されていた様々な問題を微塵も感じさせず、大会実行委員の方々の細かな心遣いが随所にみられた素晴らしい学会、ワークショップでした。スタッフの方々に改めて謝意を表します。本当にお疲れ様でした。ワークショップ参加者(50音順、敬称略)：阿倍基温(静岡県水産試験場伊豆分場)、新井章吾(株式会社海藻研究所)、安藤恵美子(鹿児島県環境技術協会)、井手陽一(海洋プランニング株式会社)、伊藤龍星(大分県農林水産研究センター水産試験場浅海研究所)、今吉雄二(鹿児島県水産技術開発センター)、内村真之(国土交通省港湾空港技術研究所)、桐山隆哉(長崎県総合水産試験場)、熊本修汰(水産大学校)、黒木善之(熊本県水産研究センター)、古賀吾(鹿児島県水産技術開発センター)、小林真吾(愛媛県総合科学博物館)、酒野光世(海洋プランニング株式会社)。鳥袋寛盛(鹿児島大学水産学部)、新村巖(元鹿児島県水産試験場)、鈴木雅大(東邦大学大学院理学研究科)、田井野清也(高知県水産試験場)、高橋昭善(東京海洋大学海洋科学部)、田中敏博(鹿児島県水産技術開発センター)、棚田教生(徳島県農林水産総合技術支援センター水産研究所)、寺田竜太(鹿児島大学水産学部)、野田幹雄(水産大学校)、野呂忠秀(鹿児島大学水産学部)、宮川朋史(東京海洋大学海洋科学部)、原口展子(高知大学総合研究センター海洋生物研究教育施設)、吉田忠生(北海道大学名誉教授)、吉満敏(鹿児島県水産技術開発センター)(東邦大学大学院理学研究科)



大会の魅力 鹿児島大会の懇親会2次会で思いがけず、新村巖さん(左)にお会いしました。先生には論文を拝読するだけで初対面でしたが、いきなり私が1992年頃に堀輝三先生の研究室で「藻類の生活史集成」(内田老鶴圃)の編集のお手伝いをしていたことを指摘されたので、びっくりいたしました。お話をうかがっているうち、当時いち早く送って頂いたオキナワモズクの生活史の精密な図版(第2巻20頁)を堀先生が「もう届いたよ」と嬉しそうに見せてくれたことを思い出しました。こんな望外の出会いも大会の魅力のひとつだと思います。大会庶務の寺田竜太さん(右)、本当にお世話になりました。(編)

